すべては未来の子供たちのために

Heart&Smile

［ハート&スマイル］ Vol.2 2015 February

FREE

©UNHCR/B.Baloch

UNHCRの支援活動によって、パキスタンの避難先で生まれた子どもたちが、まだ見ぬ故郷のアフガニスタンに向かいます。

笑顔の達人 ヴァイオリニスト・川井郁子
笑顔を作る町 東京都江東区南砂町「砂村嚬子」
笑顔を作る会社 株式会社伊藤園

Heart & Smile 第2号 2015年2月5日発行 発行：シダックス総合研究所出版 編集製作：株式会社マガジンハウス

この用紙は無塩素パルプと植林木を使用しています。

FREE

ミックス
責任ある木質資源を使用した紙
FSC® C014687

私たちシダックスグループは、生きることを幸福につなげる「人と人の絆」を支え、
真心を込めて世の中の「大切なこと」を提供しつづける健康創造企業です。

はぐくむ、大切なことのすべて

SHIDAX
http://www.shidax.co.jp

Change your Life. Change the World.

笑顔の達人

川井郁子

（ヴァイオリニスト 作曲家）

尊重し合い、助け合うことが、自然に出来る素晴らしさ。
家族のために夢をもつという強い気持ち。
現地の子どもたちは、子どもが本来もっている、
自発的な生きる力にあふれています。

守る大人がいれば、子どもは本来もっている力を発揮できる。

２００６年に娘が生まれてから、すべての子どもを愛おしいと感じるようになりました。テレビのニュースで厳しい境遇の子どもたちの様子を見ると、彼らの肌の温もりを身近に感じるような感覚です。その子たちのことが頭から離れなくなり、力になりたいと思うようになりました。

その思いから「川井郁子 Mother Hand 基金」を立ち上げ、チャリティーコンサートを行うようになり、国連難民親善アーティストとして活動を始めました。まずは難民の子どもたちに、音楽を通して元気になってもらいたい、私の演奏を通し、まだ見ぬ世界があることを感じてもらえたらと思ったのです。

活動を始めてから、職員の方にお話をお聞きしたり、難民映画祭で映画を観たりして、難民について勉強しました。知るほどに、その圧倒的な数や問題の大きさに、何かを届ければ済むことではなく、ムーヴメントが不可欠だと考えるように。そのためにも、自分が現地を訪問して、その体験を人に伝えていくことができればと思いました。

２００７年に初めてタイの難民キャンプを訪問しました。主にミャンマーのカレン族の方が暮らしているところです。水道も電気もなく、その環境は想像していたよりもはるかに厳しいものでした。大人たちは働くこともままならず、閉塞感がありました。でも、子どもたちはすごくエネルギーに満ちあふれているんです。それは訪問前に、私が勝手に思い込んでいた子どもたちの姿とはまったく異なるものでした。子どもは守ってくれる大人がいれば、本来もっている生きる力を存分に発揮できるんだと実感。どんなものでも遊びに変えてしまうし、自発的に学びたいという思いも旺盛です。私がヴァイオリンで演奏をすると、目を輝かせながら、舞台によじ登ってきて「もう一回弾いて！」と好奇心いっぱいに何度も聴いてくれます。それは、私が子どもの頃にヴァイオリンをやりたいと思ったときのときめきを思い出させてくれるような姿でした。ヴァイオリンの音に、これほどの力があるんだと改めて感じました。それを子どもたちが教えてくれたのです。

子どもたちの夢のために、大人は勇気をもって決断をする。

驚いたことに、キャンプにはヴァイオリンが弾ける子どももいました。以前来られた方がプレゼントしたヴァイオリンを、我流で練習して弾けるようになったようです。その子とカレン族の童謡を一緒に何度も演奏しましたが、すごく熱心に誇らしげに弾いてくれました。そして、最後には子どもたちがミャンマーの歌とダンスを披露してくれました。大人たちが思いを込めて、祖国の文化を伝え、子どもたちが受け継いでいる姿がそこにはあるのです。

さらに子どもたちが、私にプレゼントしてくれた絵がとても印象的でした。そこに描かれていたのは、自分が両親を連れて祖国に帰っている姿や、アメリカでパソコンに向かって勉強している姿など。彼らの夢です。将来が楽しみだと思うと同時に、夢をもつ子どもがいるから、キャンプで暮らす大人たちも、将来を真剣に考える力を得られるのだと強く感じました。祖国に帰ることができない難民にとって、選択肢の一つである第三国定住には大変な勇気が必要。知り合いもおらず、言葉も通じず、職業も思うように選べないなか、それでも定住を決意するのは、子どもの夢のためなのです。

娘さんの誕生とともに、厳しい環境にいる子どもたちの力になりたいと「川井郁子 Mother Hand 基金」を立ち上げ、国連難民親善アーティストとして活動をするようになった川井郁子さん。タイやウガンダの難民キャンプを訪問し、現地の子どもたちと交流することで、ヴァイオリンや音楽の力に改めて気づいたといいます。日本の皆さんにも難民のことを知ってもらいたいと話す川井さんは、現地の子どもたちの笑顔と勇気を、音楽と言葉で伝え続けています。

photo/Sinpei Takumi text/Yasuko Murata

©国連UNHCR協会

難民キャンプでは、ＵＮＨＣＲの職員が子どもたちと同じ目線をもって、フランクな関係を築き、支える姿も目の当たりにしました。皆すごく慕われていて、先生のように家族のように、子どもたちの思いに寄り添っている。子どもたちを見守る大きな力になっていることを感じました。

娘にも、現地で演奏を聴いてほしい。

翌年の２００８年にはアフリカのウガンダを訪問する機会に恵まれました。ウガンダでは私がヴァイオリンを弾き始めると、皆が踊り出すのです。タンゴやクラシックなどを演奏したのですが、リズムをつかむのが上手で、その踊りも素晴らしいものでした。小さい子どもを背負って踊っている子どももいて、健気でたくましいなと思いましたね。

難民キャンプを訪問して感じるのは、私は日本人の感性でヴァイオリンを弾いているということです。受け止めている側も自分の感性で聴くから、音を通して見ている風景や、感じていることには、彼らならではの世界があると思います。

日本の子どもたちの前で演奏する音と、タイやウガンダで演奏する音は、まったく違う世界を作ります。だから、日本の子どもたちにも、その場で一緒に聴いて、その音を感じてほしい。いつか娘と一緒に難民キャンプを訪問し、子どもたちと交わって遊んだり、話したり、音楽を聴いたりしてほしいとも願っています。

日本の子どもたちがキャンプへ行くことは無理でも、避難生活はどのようなものか、しばらくの間家に帰れないことを想像するだけでも、大きな気づきを得られるはずです。不自由な生活の中、年下の子がいたならば面倒を見るとか、両親の手伝いをするとか、お互いに尊重し合って、助け合うことが、自然にできている清々しさや素晴らしさが、そこにはあります。

そして、家族のために夢をもつという強い意欲。それは、多くを与えられた中で、選択していく日本では、なかなか得られない体験です。現地の子どもの生活を想像してみれば、日本の子どもたちも、本来子どもがもっている、自分で決め、行動する、自発的な力を取り戻せるのではないかと思うのです。

日本人として和の心を表現し、海外で多くの人に感じてもらう。

今後もチャンスをいただければ、また難民キャンプを訪問したいと考えています。タイやウガンダなど、以前に行った場所にも行きたいと願っています。以前会った子どもたちにまた会いたい。その気持ちを間接的に伝えてもらったことがあるのですが、そのときに、現地の子どもたちも私のことを覚えてくれていると聞き、とても嬉しかった。あの子はすごく頑張って勉強しているといった、良いエピソードもいくつか聞いて、励みになりましたね。

また、日本の方に難民となった人々のことを知っていただくチャンスを、積極的に作っていきたいです。輪を広げて、アイデアを出し合うような機会を設けていきたいと考えています。普段の生活でも、ＵＮＨＣＲに寄付をしているという人や、社会貢献活動に興味をもっている人に会うチャンスが多く、皆気持ちをもっているということに気づきます。若い方も含めて広い層に、情報を発信していくことで、多くの人が一緒になって、行動を起こすことにつながっていけば素敵だなと思っています。

私は今年デビュー15周年で、使っているヴァイオリンは３００歳を迎えます。ダブルで記念となる年ですから、自分のアイデンティティを大事にして、自分らしいことをやっていきたいと思っています。タイやウガンダでも感じたことですが、私は日本人で、曲を作っているときや弾いているとき、意識していなくても和の心が出ます。そういった部分を出して、和の作品を作る年にしたい。またそれをもって海外に行き、多くの方に聴いていただき、何かを感じていただければと思っています。

【公演予定】

■2015年2月28日

川井郁子 The Melody ～100年の音楽～ コンサート（埼玉）
場所：響の森・桶川市民ホール
時間：開場／14:30　開演／15:00
主催：公益財団法人けやき文化財団
後援：JVCケンウッド・ビクターエンタテインメント
協力：テレビ東京
お問い合わせ：桶川市民ホール ☎048-789-1113

■2015年3月15日

ダイワハウス presents 川井郁子 The Melody ～100年の音楽～ コンサート（神奈川）
場所：神奈川県民ホール
時間：開場／12:30　開演／13:00
後援：JVCケンウッド・ビクターエンタテインメント
協力：テレビ東京
特別協賛：大和ハウス工業（株）
お問い合わせ：KMミュージック ☎045-201-9999

川井郁子 かわいいくこ

香川県出身。東京芸術大学卒業。同大学院修了。大阪芸術大学教授。国内外の主要オーケストラをはじめ、コンダクター、チョン・ミョンフンやテノール歌手ホセ・カレーラスなどと共演。さらにジャンルを超えてジプシー・キングスなどのポップス系アーティスト、バレエ・ダンサーファルフ・ルジマトフ、熊川哲也、フィギアスケートの荒川静香らとも共演。作曲家としても才能を発揮。TVやCMなど映像音楽の作曲も手がける。またミシェル・クワンなどフィギアスケートの世界でも楽曲が数多く使用されている。2008年、ニューヨーク・カーネギーホール公演、2010年、映画「トロッコ」で初めての映画音楽を担当し、翌年の大阪アジア映画祭で音楽賞を受賞。ほかにピアニスト、ファジル・サイ、テノール歌手、ホセ・カレーラスなどとも共演。2012年公開の映画「北のカナリアたち」の音楽を担当し、第36回日本アカデミー賞で最優秀音楽賞を受賞している。
＜社会貢献活動として＞「Mother　Hand　基金」を設立。国連UNHCR協会・国連難民親善アーティスト、日本ユネスコ国内委員会委員を務める。

厳しい寒さを乗り越えるために

冬期の難民への支援

子供たちの笑顔を目指して。
UNHCR活動報告

住む場所を追われ、
厳しい環境での生活を強いられるシリア難民の家族。
冬の寒さが、困難に追い打ちをかけます。
難民や国内避難民の急増による資金不足などの困難が立ちはだかる中、
UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）は様々な形で支援を行っています。

©UNHCR/B. Sokol

©UNHCR/B. Sokol

上／ヨルダンの首都アンマンのアパートでUNHCRが届けた毛布にくるまるシリア難民の少女。温かいウールの帽子を持っているだけでも幸運だと感じるという。
左／シリア難民の家族が暮らすヨルダンのアパート。エレベーターは故障し、電力の供給も不安定だ。

©UNHCR/B.Sokol

母親と暮らすアリ。「僕は無事シリアを逃れることができた。そんな人はどれだけいるだろう」

©UNHCR/B.Sokol

ヨルダンで生まれた、アハメドの一番下の娘。アハメドは父親として、彼女に故郷をみせたいと願う。

©UNHCR/B.Sokol

シリアでは不動産業を営み、広いアパートに住んでいたというアハメド。ヨルダンでの暮らしとは雲泥の差だ。

©UNHCR/B.Sokol

父親を亡くし、家族とヨルダンに逃れてきた少年。毛布が与えてくれるわずかなぬくもりで寒さに耐える。

©UNHCR/A.McConnell

シリア難民のアシュラフくん。

子供たちの笑顔を目指して。

UNHCR活動報告

冬の到来が、都市で暮らす難民の生活を直撃

シリアの南に隣接するヨルダンの首都、アンマン。あるビルの6階に、8組の家族が寄り添うように暮らしています。彼らは、シリアから国境を越えて逃げてきた難民です。難民としての生活の一般的なイメージは、都市部から離れた難民キャンプでのテント生活。しかし、実は世界の難民の半数以上は、こういった都市部で暮らしているのです。

故郷を逃げてきた彼らを襲うのは、日に日に増す生活の困窮による苦しみだけではありません。見知らぬ土地で暮らす不安や孤独感はもちろん、中には医療機関でのケアを必要としている人もいます。それに追い打ちをかけているのが、冬の到来。着の身着のまま逃げてきた彼らは、冬の寒さをしのぐ為の支援を、切実に必要としています。

支援の手が届きにくいヨルダン都市部の難民

都市部で暮らす難民が、ヨルダンには50万人以上もいます。彼らは、キャンプに暮らす人々と同じく支援の対象です。UNHCRは彼らが冬支度に必要な物資を購入できるように、現金での支援も行う予定です。しかしそこには、都市部の難民支援特有の困難があります。もっとも脆弱なシリア人家族のうち、約3万世帯に対して必要な資金は1000万米ドルとされていますが、現時点ではそのわずか約半分の額しか支給できていません。都市部の難民は、地元の人々に混ざって暮らしているため、支援の手が届きにくいのです。身を守るために、名前を変えたり、身分を隠したりして生活している人も少なくありません。すると、支援はますます届きにくくなってしまいます。

ヨルダンの都市部には、シリア人以外にも避難生活を送る難民がいます。彼らの多くはイラク人ですが、ソマリア人やスーダン人もいます。すでに月1回の現金支給を受けている彼らにも、シリア人の難民と同じように現金が上乗せで支給される予定です。いずれも、難民の中でも最も危機的な状況にある人々です。

難民が急増したことで、支援金が不足しているイラク

冬支度の遅れは、難民キャンプでも深刻です。イラク北部のクルディスタン地域、ドホーク県の山間部の寒さは厳しく、12月になると気温がマイナス16℃まで下がります。そんな環境で、十分な支援を受けられずに寒さに震えて暮らす難民が沢山います。原因は深刻な資金不足です。イラク北部には、毎日300人から500人の難民がシリアから避難してきます。しかしイラクはすでに他国から逃れてきた難民・イラク国内で抱えている国内避難民さえも、支えきれていない状態なのです。実際に支援を受けられるのは24万人と、予定していた60万人の半分以下になってしまうと見込まれています。

レバノンでは、各地の気候に応じた支援が必要

シリアの西側に隣接するレバノンには、国内各地に難民が散在しています。別々の地域に暮らす約66万人に物資を行き渡せるというのは、非常に大掛かりなプロジェクトです。土地や気候により、必要な対策は異なります。優先されるのは、高地に暮らす人々。悪天候に備えてシェルターの補強工事を行ったり、必要な物資を購入するための現金を支給したりと、様々な方法で冬支度をサポートする予定です。

また、同じ高地でも、高度によって支援の内容が異なります。UNHCRは、仮設の住居などで暮らす世帯に耐候性のキットを用意する予定ですが、環境に応じて、追加の支援も行います。標高900メートル以上の地域には、毛布とストーブ、1000メートル以上の土地に暮らす世帯には、100米ドルの燃料引換券が配布される予定です。

資金不足が深刻化

2014年に入ってから、自国内にとどまり、避難生活を送る国内避難民が急増し、家を追われた人の数は急増しています。しかし、必要な資金は全く足りていません。2014年11月の時点での不足額は5845万米ドルにのぼります。この冬、最大100万人のイラク人とシリア人が、十分な支援を受けることができずに冬を越さなければいけない可能性があるのです。多くのシリア難民にとって、住む場所を追われて4度目の冬。シリア危機が長引く程、国を追われた彼らは追い込まれていくというのが現状です。一人でも多くの人の生活を支えるため、皆様のご支援が必要とされています。

ご寄付のお願い

特定非営利活動法人 国連UNHCR協会

JAPAN FOR UNHCR 国連UNHCR協会

UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）は1950年に設立された国連の難民支援機関です。紛争や迫害により故郷を追われた難民・避難民を国際的に保護・支援し、難民問題の解決に向けて働きかけています。この国連の難民援助活動を支えるため、広報・募金活動を行う公式支援窓口が、国連UNHCR協会です。皆様の温かいご支援を、心よりお願い申し上げます。

ご寄付のお申し込みはウェブサイトからお願いします。

国連　難民　検索

※ご寄付は税制優遇の対象になります。

国連UNHCR協会の公式アカウントご案内